

第一章 藤原一族が平安京に君臨した秘密

(5) 日本人が平安時代に憧れる理由

[南北と東西の中心が京都だった]

現在、京都は孤立した盆地というイメージがあるが、昔の淀川は、石清水八幡（男山八幡）あたりまで海水が入りこんでいたから、大坂湾の入江とってよかった。当時は、京都から川船で石清水八幡まで下り、そこで海船に乗り換え、難波の港で物資を積みこんで中国と交易していたくらいである。つまり、**京都は船でずっと中国に行けるほどの陸内港**だった。

また、京都の東にある逢坂おうさかを越えると琵琶湖である。**琵琶湖**はいまでもこそ陸内の湖だが、昔は若狭湾の小浜に陸揚げした物資を魚津まで運び、船で琵琶湖を縦断して京都まで運んだのである。**日本海に口を開いた入江とほとんど同じ**だった。いまでも鱧にしんや昆布が京の名物のひとつなのは、日本海の交通路によって運ばれた東北地方の物産の到着地が京都だったからである。

このように、**京都は瀬戸内海と日本海の陸内港**の役割を果たしていて、**しかも、五畿七道に通じる陸路の要衝の地**だった。

日本の街道には、東西に延びる海道と山と海をつなぐ南北の道とがある。南北の道は、塩魚や塩分を含んだままの昆布など、塩と海産物を海から山へ運び、山からは山の産物を海へ運ぶ「塩の道」である。これにくらべて、東西の道は「米の道」である。そして、米の道は、古代においては税の道でもある。東海道・東山道・山陰道・山陽道・南海道など、五畿七道はことごとく米の道・税の道で、それがすべて京都を終点としていた。

防禦が容易であり、内外交易の陸内港であり、税の道がことごとく集中している平安京は、王城の地として最適の条件を備えていたのである。

先述したように、平安京はつねに三〜四〇万人の人口を抱えて、当時、世界最大の都市だったが、その膨大な消費生活を支えることができたのは、こうした地理的条件があったからだ。

第四章 古代神話が語りかける歴史の真実

(1) 虚構だらけの「古代史」常識

[飛鳥という地名は、もともと二つあった]

……飛鳥と呼ばれる地名は、じつは近畿地方には二つある。一つは現・奈良県明日香村であり、もう一つは現・大阪府羽曳野市にある。古代には、この二つを区別して、大阪府の飛鳥を“近ちかつ飛鳥”、奈良県の飛鳥を“遠とおつ飛鳥”と呼んでいた。

奈良県飛鳥は、大阪府飛鳥地方に住んでいた渡来人集団が移住して開拓した土地で、自分たちの郷里の名をそのまま付けたから飛鳥が二カ所できたのである。

彼らは、何を求めてこの地に移住したのだろうか、それは、この地が当時の水源神（雨請いの神）の地であり、稲作農耕に適した豊かな土地であったからである。

[アスカとは喫みそぎの意味であった]

奈良県飛鳥地方の地形は、低い丘陵に狭まれた、谷間のような沖積平野である。なぜ、このような狭い谷間でなく、もっと広い奈良平野に移住しなかったのだろうか。

現代人なら、そう考えておかしくない。

事実、飛鳥と奈良は目と鼻の先である。羽曳野から移住してきた旅路を考えれば、それほど困難な道程ではない。

しかし、彼らは狭い飛鳥地方を選んだ。理由は簡単である。現代人は、たとえば関東平野のように、だだっ広い土地のほうが農耕に適しているように考えがちだが、それは逆である。**広い平野は水田一枚一枚の高さの差がつけにくく、**

すぐ水が流れなくなってしまう。ひじょうに正確な測量法がなければ灌漑ができないのである。

古代では、丘陵があって、土地に高低差があり、高いところから低い土地へ、水が流れていくようなところが、水田を開拓するのにもっとも適していた。渡来人たちは、当然のように飛鳥を選んだのであった。そのうえ飛鳥は、水源神の祀られている聖地であった。

そして、移住してきた渡来人たちの目の前の奈良平野には、のちに述べるようにひろびろとした美しい湖が開けていた。古代の奈良県飛鳥は、湖に飛鳥川が流れ込んだ河口にあたり、肥沃な土地だったのである。

渡来人たちは、この地方で水田開拓を行なった。建築・土木・絹織物などにも高い技術を発揮し、石舞台古墳築造のような巨石建造物を華やかに展開した。また、彼らは文字を解してしたから、飛鳥地方は、奈良県の文化的中心地となり、さらに、渡来人と結びついた蘇我氏のような豪族を生んで、政治の中心地ともなったのである。

天皇の宮殿が飛鳥地方に集中した原因は、渡来人たちが培った高い文化の中心地であったことにもよるが、もう一つは、飛鳥川が古代人たちにとって神聖な川だったからである。

飛鳥の字音アスカは、喫の意味である。アスカ・アスク・イスク・イズズの語は、いずれもミスズギがその語源で、伊勢神宮の五十鈴川も、大和の飛鳥も、ミスズギ川だったのである。大阪府飛鳥を流れる石川もイスク川であり、古くは飛鳥川と呼ばれていた。

その証拠に、持統天皇は在位中、飛鳥川を通過して、吉野川の河原で三回も喫をしている……。

[(略)]

[内陸にある「香具山」から海が見えた]

さて、話を元に戻すと、大和平野のまん中に、巨大な湖があったことに私か気づいたのは、『万葉集』にある舒明じょうめい天皇の国見の歌からである。

大和には 群山むらやまあれど とりよろふ 天の香具山 登り立ち 国見をすれば 国原は けむりたちたつ
海原は かまめたちたつ うまし国ぞ あきつしま大和の国は <引用者：かまめは、カモメのこと>

この歌は、「天の香具山に登って自分の統治する大和を眺めてみると、大和国原には霞がたなびいていて、海原にはカモメが飛んでいる、なんと美しい国だろう大和の国は」という意味である。

現在、橿原市の天の香具山に登って下を眺めても、海原らしいものはなにひとつ見えない。あの標高一五〇メートル余りの山から、西の標高四〇〇メートルの山を越えて、大阪湾の海が見えるわけではない。

そこでこの国見の歌の出ている『万葉集』の注釈書を読んでみると、どの本にも、天の香具山から見える海原は、埴安はにやすの池（香具山の麓にあった）だと書いてある。そんなことはありえないと私は思う。

かつての埴安の池の範囲は現在の水田の字名によってほぼわかるが、香具山麓の小さい池で、はたして埴安の池が大和の海原と表現されうるに値するか否かは、一度、香具山に登って眺めてみるとあきらかである。

だれかが大和の海原は埴安の池らしいと言い出すと、実際に確認もしないで、みんなが口をそろえて埴安の池であると断定してしまうのである。こんな非現実的な解釈よりは、海原は現実に見える海ではなく、国原の対句として用いられた比喩的な表現である、と解釈したほうがまだましだといえよう。

だが、大和の海原は、比喩的表現としての想像上の海にすぎないわけではなかった。

[(略)]

(2) 大和王朝成立と古代大和湖やまこの謎

[かつて大和平野に巨大な湖が存在した]

では、なぜ大和平野には、かつて巨大な湖があったと証明できるのだろうか。

現在、大和地方は蒸し暑く、湿度がきわめて高い。これは、大和が周囲を山に囲まれている盆地であるばかりでなく、地下に大きな宙水があって、たえず水がたたえられているからである。この滞留水が地表面ににじみでて水蒸気となって蒸発するため、大和平野はきわめて蒸し暑いのである。

大和の古い木造建築が現在でも残っているのは、大和が乾燥しているからだ、という間違った説を唱える学者もいる。

ひどいものになると、正倉院の倉庫は、秋は虫干しをしてあとは扉が閉められるので、いつも十月末から十一月初めのころの大和の乾燥した気候のままの状態になっているから、多数の文献や織物、木造品が一二〇〇年間も保存された、という誤りを平気で主張する学者もいる。

だが、これはまったくの間違いである。

正倉院の倉庫には湿度計が入れてあって、年間の湿度が毎年記録されており、この記録を見ると、内部がたいへんな高湿であることがわかる。ただ、湿気の高低差はない。大和平野は、一年中、湿気の高低差が少ないところなのである。

百貨店に行くともわかるが、漆器や呉服の売場のガラスケースの中には、水を入れたコップを置いて湿度を一定に保っている。中が乾燥しきると、有機物が乾燥して破損するからである。木の電柱も、地下に埋まっているところは、案外に残っている。いちばんひどいのは、地面に電柱が出ている境目のところである。

これはたえず湿ったり乾いたりしているので、膨張・収縮を繰り返し、本の繊維がすぐぼろぼろになってしまうためである。

大和平野は湿気が多いが、地下水が滞留して、たえず水分を補給するので、湿気の高低差が少なく、そのため正倉院の宝物が保存されたのである。

現在でも、大和地方の地下には沈んだ地下大和湖があるわけだが、それは、かつて湖底に沈澱した葦あし類の堆積土壌に保水性があり、そのためたえず水分をたたえているのである。

[大和平野標高六〇メートル地点の謎]

では、この地下大和湖が、かつては大和平野に湖面を輝かした大和湖でめったと、なぜ証明できるのだろうか。

石器時代の終わりごろの遺跡が、奈良県全体で、約三〇〇近く発見されている。これらの遺跡は、大和の吉野溪谷から始まり、宇陀・三輪を通過して大和平野に降りてくるが、平野の周縁部に広がるだけで、中央の平坦部にはまったくないのである。そして、周縁にある遺跡は、いずれも標高六〇メートルほどの線までである。

これが弥生文化の一八〇〇年ほど前の遺跡になると、標高五〇メートルの線まで下りてくる。もっとも標高の低い島根山しまねやま古墳も、やはり標高五〇メートルの線で止まっている。

これはどういうことかという、**石器時代には標高六〇メートルが、古墳時代には標高五〇メートルが、人間が生活できる極限線だった**ことを意味している。それ以下の低い土地には何らかの障害があつて、人開か住むことができなかった。

そして、住むことができなかった障害とは、そこに水があつたからである。標高五〇メートル以下の土地はすべて、かつては水中であつた。つまり、**大和湖の湖面が、二七〇〇～二八〇〇年前の石器時代には標高六〇メートルの線にあり、一八〇〇年ほど前の弥生時代には、標高五〇メートルまで水位が下がった**ということなのである。

以上述べた私の推論が正しいとすれば、七世紀、天の香具山に登られた舒明天皇は、まだ残っていた海原のように大きな湖に、真白なカモメの飛びかう美しい情景を、実際に眺められたのではなかろうか。この歌は、埴安の池とはあまり関係のない歌だと言いたい。

[なぜ、北九州にではなく、大和に都ができたのか]

弥生文化が、おもに西日本で発達し、なかでも大和と北九州に大きな文化圏ができたことはよく知られている事実である。だが、なぜ、大陸文化を早くから受け入れた九州に王朝ができず、大和に日本の古代王朝が誕生したのだろうか。

それは、大和平野に巨大な湖があり、時がたつにつれて、水位が下がっていったことに大きな原因があつたと思われる。

水位が下がったのは土地がしだいに隆起したからであるが、水が引いたあとの湖畔の土地はよく肥えていて、農業にもっとも適した土地であつた。しかも、大和平野は周りを山に囲まれているため、強い風を防ぎ、夏は蒸し暑くて、水田で稲を栽培するには好条件であつた。また、地形が複雑で上地の高低差があり、斜面に恵まれていたことから、**大和地方に水田稲作農耕がいち早く発達し、それが大和王朝を生んだ**のである。

土地に高低差のあることが、水田の灌漑には必要条件であることは先に述べたが、斜面が古代の農耕に大切なことは、

ほかにも理由があった。

だいたい日本の水田耕作は、はじめに焼畑開墾を行なった。山林や原野を焼くと、火はまず上にあがっていく。上のほうがよく燃えるから、燃え上がってしまったところへ、焼けた草木の炭や灰を鋤きこむ。自然土壌は酸性が強いので、こうして炭や灰の含んだアルカリで中性土壌に変えるのである。そこへ雑穀やカブ、豆などを蒔く。

これが第一段階で、火で焼いてつくる耕作地だから、火の田、つまり“畑”である。耕しているうちに、木の根も腐ってなくなる。また、石なども取り除く。妨害物を除き、凹凸もないほどよく耕すと、しだいに水平面ができる。これが白い田、つまり畠である。それが完全に水平になったとき、水を引いて“田”をつくり、水田稲作を行なうのである。畑・畠・田という文字は、日本では、水田開拓の順序を証明しているのである。

[日本では、“耕して天に到る”のではない]

子どもの砂遊びを例に採ってもわかるのだが、斜面に下から水平面をつくっていくと、じつに危険である。上から鉄砲水がくると、すぐに崩壊する。逆に、上から水平面をつくれれば、鉄砲水がきても下へ流れていだけだから、上の水平面は安全である。このようにして、上から下へ斜面を開墾して水平面をつくり、古代日本人は、しだいに水田を広げていったのである。

中国の『資治通鑑』に「耕して天に到る」と書いてある。だから、耕作は下から上へあがるものだと、ほとんどの学者が鵜呑みにしている。中国は畑地だから下から上がるのだが、それを考えずに、日本の水田もそうだと思い込んでしまう。だが、これはたいへんな誤解で、水田の耕作は、いつでも上から下へさがっていったのである。

だから日本の苗字で、山田・上田・高田・本田などは、高い土地に水田を最初につくった開拓者で、水田が下に広がっていくと、これらの苗字は、苗代を管理した本家を意味した。一般論としては下田・平田などは、耕作地が下にさがったところにできた分家的な苗字である。

このように**焼畑農業の原理と、水の自然流下方式をうまく生かして、上から下へと水田を広げていったのが、日本の水田耕作の歴史**だが、**大和地方はその斜面地に恵まれ、しかも耕作地が下に広がるにつれて、水の引いた肥沃な土地に出会えたから、いち早く稲作文化が発達したのは当然だった。**

[なぜ、日本の階級分化は早かったのか]

稲作が発達するにつれて、大和地方では部族を基礎とする集落体から、地域性のある原初の国家の形が芽生えてきていた。そして他の先進的な地域が、まだ部族集団でとどまっている段階に、大和だけは地域国家から集権国家へと、他の地方よりはるかに早いスピードで政治力がふくらんでいった。

これは、稲を栽培することで、庶民同士、あるいは貴族と庶民との力関係が明確になり、階級分化が進みはじめたからである。いわゆる社会的な支配関係が、この地域では早くから成立したのである。

稲以外の作物では、それほど階級分化は起こらない。ヨーロッパでは、畑作農耕が始まってから国家が成立するまでに、約一〇〇〇年かかっている。ところが日本、とくに大和地方では、紀元前三〇〇年ころに稲の栽培技術が渡来してから、わずか四〇〇～五〇〇年で原始国家が誕生している。

これは、稲というものがきわめて多収穫性の植物で、うまく栽培に成功すると家族では食べきれないほどの余剰食料ができるからである。

しかし、稲作は失敗する率も高い。ある田が実り豊かでも、その隣りの田はわずかな土地の高低の差で水が不足し、あるいは日照りで稲がやられ、実りがないというケースも少なくない。

収穫の多かった家は、あまった米を大切に保存する。米を精米して白米にすると長持ちしない。一年ぐらいで栄養価も三分の二程度に減少してしまう。ところが粳をつけたまま保存すれば、栄養価が半減するまでに一〇年もかかり、食用とならなくなるまでには数十年もかかる。つまり、米を粳のまま貯えておけば、いつまでもその価値は失わず、財産として通用した。

一方、収穫に失敗した家は、その日の食物にもこと欠くようになる。すると、収穫のあった家は、収穫のない家に米を貸し付けて利子を取ったり、あるいは代償に自分の家で労働させたりした。こうして富の集中や支配関係が生まれて

きたのである。とくに、村落の祭祀権を支配することができたことは、神の権威をかりて人間支配のもとを作ることにもなった。

こうして、米を多く貯えている家や一族は、同じ村の中でも社会的地位が高まり、大きい支配権を持つようになる。水田稲作農耕の技術がさらに進むと、富と権力は、ますます特定の人間に偏って、権力者（豪族）が出現することになる。

[条里制が証明する統一権力者の存在]

豪族によって支配された統一地域圏は、やがて「くに」に成長し、豪族の中の豪族、すなわち王が現われて、連合組織の他の豪族たちを支配するようになっていく。

とくに大和地方では、登呂遺跡（静岡市）に見られるような、計画的な水田の区画法が早くから行なわれていた。この地域には、律令時代の条里制の区画が、いまなお水田の区画に名残りをとどめているが、先年の発掘で、その地下の部分に、律令制以前の長方形の条里が出現した。一区画が約二五〇坪、整然としたものである。

二五〇坪というと、ほぼ登呂遺跡の区画の半分の面積、おそらく、大和の地形が複雑なところから小さくしたのであろう。このような細かい土地の区分けを計画的に行なうには、それを統一指導する人間が必要になってくる。

大和地方に、いち早く古代王朝が生まれたのは、支配者が計画的に土地を区分して、農民たちに十分な労働面積を分け与え、その結果、収入を蓄積して強大な経済力を持つことができたからである。

大和朝廷は、この意味から、大和湖周辺の肥沃な土地が生んだ権力者であり、余剰な米の蓄積が生んだ政権といえるのである。

[神話と歴史の不可思議な一致——神武天皇]

大和朝廷の権力者（天皇家の祖先）の起源がいつごろであるかは明らかではない。日本史を述べたもっとも古い『日本書紀』や『古事記』によれば、第一代天皇はカミヤマトイワレヒコノミコトと伝えられている。つまり神武天皇である。

戦後、神武天皇の解釈が大きく変わり、神武天皇伝承は大化改新後、貴族制律令国家をつくりあげた天皇家の祖先功労物語であるとか、日本建国の古さを説明することによって、日本という国家を権威づけるためにつくられた寓話であるという説さえ生まれた。神武天皇が、はたして実在の天皇かどうかは別にして、『日本書紀』や『古事記』に書いてあることを、学問的根拠もなしに頭から否定してしまうのは、戦前、神話をすべて鵜呑みにして「歴史」としたことと同じくらい滑稽な話である。

なぜなら、**神武天皇の話の内容は、じつは古代の大和に存在したいくつかの歴史的事実の印象や伝承を編集、つまり日本の古代社会の雰囲気を実に表現した部分が、数多く含まれているからである。**

たとえば、地名である。

神武天皇は九州の日向を出発し、東へ進んで大和に入ると、長髓彦・兄猾えうかし・弟猾おとうかし・土蜘蛛などの未開人を平定し、畝傍山のふもとの橿原の宮で天皇の位に即いた、ということになっている。

この**長髓彦**や**兄猾**・**弟猾**・**土蜘蛛**などがいたという土地や、**橿原**など、**神武天皇**に関係のある地名が『日本書紀』や『古事記』などに三三カ所ほど挙げられているが、これらの地名を大和の土地にあてはめると、すべて**標高六〇メートル線以上**に存在していることがわかる。

しかも、その土地は、大和湖のまわりの小高い所で、**縄文土器の出土する遺跡とぴったり一致している**のである。

もし、神武天皇伝承が、奈良時代にだれかが勝手に作りあげたものなら、うっかり、標高六〇メートル線以下の、古代においては湖底にあたる地名も出る可能性がある。**奈良時代には土地の隆起がいちじるしく、大和湖は幻の湖になっていた**。昔は水位が六〇メートル線にあったなどということは記録に残されていないからである。

とくに驚くべきことは、神武天皇の都とされている橿原が、ちゃんと存在していたことである。

[隋の答礼使は、船で三輪山に着いた!]

江戸時代の国学者・本居宣長が『古事記伝』を書くとき大和を実地調査して、橿原の地には、その地名さえ残ってい

ないと嘆いた。『日本書紀』や『古事記』の内容を頭から否定する学者たちは、宣長でさえ橿原の地名はないと言っているのだから、あの神武天皇の橿原の話は根拠がない、だいいち橿原の地名の由来である橿の木さえ生えていないではないかと言う。

ところが、奈良県が畷傍山東南の県営グラウンドを工事したときに、イチイガシの大本に囲まれた石器時代の遺跡が発掘された。

石器時代から縄文をへて、弥生文化時代にまでつながる集落跡の出現であった。しかも、それは**標高六〇メートルの湖岸線の、半島状に南から北へ向かった突出した地形**であった。その半島の縁には、杭を打った**船着場**のような設備さえ発見されたのである。

また、この遺跡からは、アカエイやサバ・アジなどの海の魚の骨や、クジラの骨までが出土した。おそらく、これらの魚は**大阪湾から大和川に入り、大和湖を舟で運ばれた**ものであろう。このようなことから、**橿原は古代の港町の遺跡**だと証明することができると思う。

この**橿原遺跡のほかにも、大和湖の陸内港はいくつもあった**。たとえば、**大和の三輪や、橿原の少し南にある大軽おかる**という村落である。

推古十六（六〇八）年、日本からの遣隋使・小野妹子が帰国する際、隋からは答礼使・裴世清はせいせいが派遣された。『日本書紀』の「推古天皇の条」によれば、難波なにわにわで一行を迎えたのは美しく飾られた日本の飾り船三十艘みそふね。答礼使はその船に乗って**大和川を遡り、大和湖を渡って海石榴市つばのいちで上陸**したのである。**海石榴市はいまの三輪**だが、なんと大和の三輪は、遣隋答礼使の上陸地点であった。

また、大軽は軽市かるのいちの跡であり、応神天皇の軽島豊明宮かるしまとよあきらのみやのあった所である。ここに百濟から王仁わにや阿直岐あちきが『論語』と『千字文せんじもん』を持って上陸した。

大和湖の存在を知らない人は、どうしてこんなところに『論語』や『千字文』が到来したのかと不思議がるが、**大和川・大和湖で大阪湾に直結していた陸内港**であれば、船でここに上陸したとしても、なんの不思議もない。

神武天皇伝承は、大和が水田稲作農耕の最適地だったばかりでなく、船運による交通・輸送・交易の発達した土地であり、それが日本最初の王朝をつくった原因であることを教えているのである。

ここに神武天皇伝承を持ち出したからといって、私は神武天皇の存在を即断したり、その伝承を史実だと言っているのではない。私か言いたいのは、この**古代伝承を、はじめから無条件にありえない話だと決めてかからないで、その背景にある古代文化の流れの事実を認め、こんなストーリーが生まれてきた必然性を再考**してみてもどうか、ということなのである。もちろん、伝承はあくまで伝承であって史実でないことは、あらためて述べるまでもない。だが、伝承には伝承としての意義のあることも、けっして忘れてはならないということである。

(3)『倭人伝』では、邪馬台国の秘密はわからない

【略】

【三等資料の『魏志倭人伝』に、なぜこだわるのか】

……『魏志倭人伝』は、その風俗や倭国の政争などの一部の記事を除いては、文学に近い記述が多いように思う。一般に『魏志倭人伝』と称されているが、正しくは『魏書』のうちの「東夷伝倭人条」のことである。「倭人条」を記述した陳寿ちんじゅうは、自分で邪馬台国の位置を確かめたわけではなく、その前の史書『魏略ぎりやく』にもとづいて書いたのである。

ところがこのもととなった『魏略』そのものも、漢の時代から朝鮮半島に置かれていた帯方郡の郡使あたりから伝聞した内容を、整理・解釈しただけのものである。いわゆる三等史料以下のたよりない代物にすぎない。だから『魏志倭人伝』の記述は、伝聞のそのまた伝聞で、その内容に正確さを期待するほうが、どだい無理な話なのである。

たとえば、邪馬台国の位置である。末盧まるとろ国（九州唐津付近とされる）に上陸して東南に六〇〇里、東へ一〇〇里、船で南へ二〇日、さらに南へ水行一〇日、陸行一月で邪馬台国へ着くと書いてあり、この通りに進むと、どうしても太平洋の海の中に行ってしまう。

当時の一里と現在の一里では、長さの尺度が異なっているかもしれないとも考えられるが、一日に歩行する距離は、現在とはほぼ同じとすると、いずれにしても海上となってしまう。

これを、方向を書き誤ったのだらうと解釈しても、書き誤りであるという明確な証明がないかぎり、あくまで仮定、想像でしかない。

方向・国名（邪馬耆〈壹〉国か邪馬台〈臺〉国か）・人名（イヨカイトか）それぞれを、書き誤りという無理な前提に立たないかぎり、九州だ、大和だという説は、どちらも成り立たない。

[略]

[卑弥呼は何十人何百人といた]

しかし、邪馬台国の女王・卑弥呼を特定の個人にあてはめるには無理がある。卑弥呼は北九州にも、大和にも、またその他の地方にもいていいのである。

卑弥呼は、特定の個人を指す固有名詞ではなく、「ヒメミコ」を意味する普通名詞なのである。ヒメは女性、ミコは巫女である。

『魏志倭人伝』では、卑弥呼は鬼道に仕え、よく衆をまどわし、国が乱れても彼女が立つと、すぐ治まると書いてある。ここでいう鬼道とは、中国から見た鬼道である。中国と日本では、当然ながら神は同じではない。

中華思想で考えれば、野蛮国・日本の民が信仰している神など、しよせん死者の靈魂を中心とする「鬼道」にしか見えなかったのであろう。おそらく、この卑弥呼は神に仕えていた巫女で、信仰的に国を治めていた。

卑弥呼は神に仕え、神憑かみかかりりをして神の意志を伝え、一般民衆を指導していた。日本の古代社会は母系社会であった。そこではシャーマニズム信仰が共同体社会を支配し、かならず神に仕える女王（ヒメミコ）がいた。

だから、**当時の日本に無数にあったと考えられる村落国家には、これまた同じく無数のヒメミコがいたはずである。**

おそらく彼女は、村落を治める主婦たちの代表者で、ふだんは勤勉なおかみさんだが、政事や農事の必要に応じてヒステリー現象を起こし、神憑りし、神の託宣を告げたのであろう。こんなときの彼女は、ひきった、こわい表情であったはずで、どう見ても美女だったとは思われない。

このような卑弥呼の治める村落国家の連合体の一つが邪馬台国で、その最高の支配者の一人を女王・卑弥呼と呼んだのではなかろうか。

[略]

[九州・中国・大和に巨大勢力があった事実]

このように、農耕・資源・交易・交通・地理的条件など、さまざまな理由から、大和に最初の統一国家の一つができたと考えても不思議はない。したがって、邪馬台国が日本最初の統一国家であるなら、大和もその一つであるとするのが自然であり、これが邪馬台国大和説である。

けれども、北九州も“火の国”として別種の文化圏を持っていた。墳墓も発達し、卑弥呼のような神憑りによって政治を行なう女王が存在し、地域国家としてのまとまりができていた可能性も、当然考えられる。『魏志倭人伝』にいう邪馬台国が九州にあったとしても、これまた少しも不思議はない。

いずれにしても、『魏志倭人伝』の、**不正確でわずかな記述から、邪馬台国論争を無限に繰り返すのは、趣味としては自由としても、すくなくとも歴史学的にはあまり意味がない。**それより大切なのは、二、三世紀の日本文化の中心がどこにあったかということである。

まず最初に、大陸や朝鮮半島に近い九州に文化があって、それがしだいに東に伝播し、吉備・出雲地方を中心とする中国地方文化、そして大和文化の成長を促した。二、三世紀の時代には、日本文化の中心は大和と九州の両地方にあり、その中間に中国地方文化圏が存在した。それがやがて、大和地方の優位となり、日本で最初の統一国家をつくった——これがおそらく真実の姿だらうと、私は考えたい。

(4) 元来、日本は多民族国家だった

[埴輪はズボン姿なのに、なぜ着物文化になったか]

・・・・日本の生活文化は、米や稲作農耕を抜きにしては、およそ考えられなしということになった。

米食中心の食生活が、日本酒・味噌・醤油・納豆・漬物など、世界でもっともすぐれた発酵食品を生み、この食生活は、衣生活や住生活にも大きな影響を与えたのである。

水田労働着である貫頭衣かんとうい(一枚の布の中央に穴を開けてかぶる衣服)は、石器時代の筒袖やズボンに代わって、日本人の通常衣となった。

古墳などがら発掘される埴輪の衣服は、イナバの白ウサギの主人公・大国主命のような服とズボンのスタイルである。古来、日本人の服装は、このような、むしろヨーロッパ的な衣服であったと考えられる。それが稲作の発展とともに東南アジアの衣服が入って貫頭衣となり、やがて袖そでと衽おくみが付いて、小袖系の日本独自の着物が出来上ったと思われる。

また、古くは竪穴式住居であった日本に、稲とともに入ってきた高床式住居は、はじめは米を貯蔵する倉庫として使用されたが、やがて貴族の住宅様式となって殿とのと呼ばれるようになった。貴族のなかには、高大な木造家屋を造る者も現われた。それが、一般住宅にも採り入れられ、現在の木造日本家屋の母型となったものと思われる。

[略]

<この文書は、「**生駒の神話**」(下記 URL をクリック)に掲載されているものです。>

<http://ikomashinwa.cocolog-nifty.com/ikomanoshinwa/>